仏蹟参拝

五重相伝

諸国からの浄志はつもってインド仏蹟参拝の資金準備はできた。（一説に千八百円ばかりという。一二異説あり数は確ならず）十二月渡天事務所の徳寿院で、お別れの意味で五重相伝をつとめ、明治二十七年（一八九四）（三十六歳）十二月十五日朝八時フランス船サラージ号の中等船客として横浜を発航された。

横浜発航

冬の日脚早くいつしか海は煙波漂渺として暮れかかり、西日を負うて紫金に輝く富士山の東洋鎮座の霊容が一層神(こ)うごうしい。

時は日清戦争の最中である。

「もろこしの山のあなたにかゞやかん、わが日の本のてらす光りは」

伸びる日本が極東の安定を血であがなわんとして、剣は剣とあい交わっているこの時、光は光とあいとけ合って、常恒の平和を霊にあがなわんとする伸びる日本の、伸びるもう一つのすがたは、世尊を慕う法孫のインド巡礼の鹿島立ちとなった。

剣でおこる国はまた剣で亡びることがある。光で結ぶ心と心とに国をこえて国をおこす恒久な万邦親和の軌道は布かるる、か否かは自然に委ね去りて、純真の一心に大恩教主のみあとを慕う日東の一比丘、心は身に先立って早や天竺に在り、日の入る方より船に遅き身を招く。

「西天の聖蹟参拝発錫のとき

「恋しけれ西にかたむく夕日かげ、さすがにみあと慕う身なれば」

翌十六日船は神戸に寄港

「当港に着し候、船中日本人一人も無之、支那人に日本語の通ずるものあり、はなしもでき候。上海まで私がせわいたしますと語り候」

船は長崎をへて日本を離れた。

うす紫に消えてゆく五島の島山を見送ってあとは涯なき青海原、瑠璃色の空はカラッと晴れて冬の浪が白く高いのを眺めても、まず想い出さるるは、昔のひじり達が、片々たる孤舟に乗ってこの白浪を蹴って漢土に法を求めて往き還りしたる中には、幾人かは波の藻屑となった不惜身命の法の旅。

上海・白人結縁

十二月二十日船は上海に投錨、翌日ここでマルセイユ行きのオキシュース号に乗りかえ、船は一路南に向う。

空や水、水や空なるまんまんたる瑠璃の海を進むにつけて日々加わる温かさ。入る日出る日をかぞえゆけば、早やふるさとは幾千里のかなたとへだち、別れきて日の出る方に思いやる人の情けと、西の方はてしも知らぬ灘を残した世尊のみあとを、朝夕にしたい暮す言葉も通ぜぬ遠洋の一人旅。

「印度仏蹟参拝航海中

「国をおもい仏をしたう朝な夕な日の出で入りのかたぞこいしき」

船中では米粒や紙片に名号や画を書き与えて欧州人に仏縁を結び、その他に語る人もなく、自然に与えられた海上の阿蘭若、くる日もくる日も三昧を修して心の空にすむ月をながめられた。

熱帯の陽光を浴びた紺碧の海を船はひたぶるに駛りはしる。

「はるかなる浪路の外をおもうかな、わがたらちねの親のふるさと」

法のたらちね霊の親、慕いゆく教祖のふるさともだんだんに近づきて、明治二十八年（三十七歳）一月元旦はシンガポールで迎えられ、同一月六日セイロン島コロンボ港に安着された。

セイロン島の十二日

「航路海をかえども跡をとゞめず、

一月六日早暁の頃、名残りを甲板の上に止め、船はやコロー坡に達す。

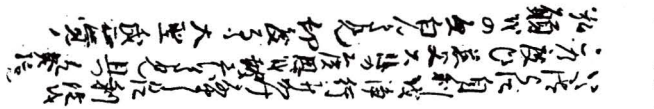
慈父報恩の広きをおもえば、航路何ぞそれかくのごとくちかきと、欽景欣慕の情ふかければ海路の遠きを覚えず。航路二十三日なおし一日のごとく、最も楽し船中の禅。

日々外つ国びとに勝縁をちぎりて遠く菩提の勝果を期す。ひとえに無常を念ずるときは時光〇〇（二字不明）を一月一日のごとく、無上正法の重きを念えば身は軽毛のかろき、七覚を（一字不明）唯喜覚の一支をいでず、八正をゆかんと欲するも、正語のひとつのみ（一字不明）と。未だ一（一字不明）の妄塵を払わず、船なんぞそれすみやかなるや。」と述懐された。また

「かつておもう、われ平生不徳の身として縁を四方に結び、所作のために意を一にして、三昧を修する能わず。この航海中において幸にして余縁を絶す。この時にこそとおもいしに、固よりこころくらく識散じぬれば、中々に散乱ソウホウの（念）止かたく〇〇〇、暴風の白浪おこすよりも甚し。海波止がたければ、観慧何によつてか（能）せん。

しかしながら平生所作の身（なり）にくらぶれば船中の三昧最も良とおもいぬ。自らおもう予船中却

つて平素よりも身健かにして、四大調和せるは是何故ぞ。全くこころを三昧の城に食をほしきまゝにして　禅悦の味にこころをなぐさめたればならん　しかれどもなまじいに船中にして米粒あるは絹などに



仏ぼさつの形像等を書いて外国の人にあたえければ、人々あらそうて乞う。上下等の室の人はおなじくはみなに与えんために、間をかけしもコハ全く未だ習気のしからしむるところ拠なき事にて（ぞ）」

また「いたづらに自利を浄行にかけ、なまじいに利他を、この度び慈父大悲の広恩を報いんがため、且つは発起せる弘願をのべ白さんがため、印度なる大聖成正覚の道場に詣でんと、十方の加祐によりて準備已になつて〇〇〇〇〇

又かつて自らおもう宿願出家する前願くば生前に三昧を得、〇〇無生忍を期す　平生ものうくして自行を浄業（長勤修）にかけ、いたづらに時光をついやして　なまじいに縁を四方に結んで利他を何ぞよくするを得ん。恥べし慚べし悲べし」

「うれしさのあまりに落つる涙をば我がころもでにつゝみかねつゝ」

「み仏のみあと訪ふ日のうれしさに玉なす涙けさにつゝまん」

島には黒田真洞師（浄土宗本校々長）の推挙でインドに留学し、広安真随師にも縁故深き仏教徒村山清作氏（帰朝後銀行員となる）がいて、インド案内をしてくれることになっていた。氏はコロンボから五哩ばかりのウエラワッタのパーマンカダ村の貴族で大変熱心な仏教信者なるウイラクーム夫人の家に止宿して学校に通っていた。

スマンガラ師

上人は十日間ばかりセイロン島に滞在し、村山氏が通学の暇々に案内して有名なサイアム派のスマンガラ僧正を訪問したり、キャンディーの仏牙精舎に参拝したり、その他博物館、図書館、学校、教会等も廻覧された。スマンガラ僧正にはしばしば面会された。村山氏の通訳で日本仏教のことを聞かれても、上人はあまり多くを語らない。いつもニコニコしていられるのみであった。むしろ通訳の村山氏自身が日本の事情をとりつくろって返事した。

仏牙精舎

島内の有名なキャンディー仏牙精舎に参拝した時は、村山氏が所存ありてかねて用意の紫の法衣、金襴の袈裟、錦の頭巾を着用して下さいと願った所、上人も喜んでこれを着用し、汽車に乗り印度人や西洋人の間に伍して行かれた。車中常にニコニコ笑ってあたかも無邪気な小児のごとく、外国にきているような気分は少しもみえぬ。時に同乗の一英人が我々は今日本の美術品をみると嘲り口調でいったから、村山氏は「諸君の方のキャンタバリー大僧正はどんな風をしているか」と反問すると、その英人は黙って了った。上人は今何をいったかと聞かれるから、そのよしを話すと「それは面白くできた」と笑われた。

キャンディー駅につくと、上人の異様な風彩（荘厳服）を珍らしがって、印度人の老若男女

が周囲に集ってくる。さまざまな批評をしたり、あるいは衣の袖にとりついたり、下駄にさわったりするのを、するがままになって、小児のように無邪気にニコニコと笑っていられた。

言葉通ぜぬ異国の衆生、解脱の服に目を引かれ、福田の衣の袖にさわるのも、せめてもの他生出離の縁のはし、一切は度生の方便にならぬものはない。

仏牙精舎では容易に開かぬお厨子を開扉していただき、恭敬をつくして念仏礼拝された。それから植物園を廻覧して帰られた。

外人結縁

一月十七日セイロン島を去りインド本土に渡られた。その汽船中食後には食堂に止って、花鳥等の日本画をいろいろ書いて同乗の外人に請うままに与えれば、外国婦人子供などは常に上人の周囲に集って、嬉々として話をしていた。なかんづく米粒に名号や百人一首を記して与えるので、船中の大評判となった。

二十三日船はガンジス河の河口に着いた。世尊が渡り給いしガンジスの流入る海に走る舷に身をよせて、あくがれやまぬ世尊のみあとを慕う人をはこぶ船は、午後四時帆柱と煙の港カルカッタ市に着いた。ホテルで休憩後、ダンマパーラ師に面会し、師の紹介でビルマ前国王の邸に伺候し、いろいろ種々物語りの後、王から豊富なインド料理の饗応をうけられた。

正覚道場

仏陀伽耶

一月二十四日いよいよ釈尊成道の聖地仏陀伽耶に参拝さるることになった。

「なか〳〵に聞くさえかたきみ仏のみあと訪う日のうれしかりけり」

むかしの遊記に「城ノ西南五、六里ニシテ伽耶山ニ至ル　渓谷杳冥トシテ峯巌危険ナリ……山頂上ニ石ソトバアリ　高百余尺育王の所建ナリ……東大河（ニレンゼン河）ヲ渡リテ鉢羅笈菩提山（唐ニハ前正覚山ト云）如来勤苦六年未ダ正覚ヲ成ゼズ　後苦行ヲ捨テ乳靡ヲ受クルコトヲ示シ行テ東北ヨリ遊……金剛坐上菩提樹者即ヒバラ樹ナリ　昔仏在世高数百尺屡残伐経テ猶高四五丈　仏其下ニ坐シテ正覚ヲ成玉ウ……云々

の記を拝読したる時、写し取りまでして多年あくがれきたりし世尊成道のみあとを、今まのあたり拝むことの辱なさに、身も軽く心も勇み立ち、ガヤの駅に汽車を捨てて馬車に乗り坦々たる野路をゆくに、ニレンゼン河の下流をへだてて向う岸に、突兀（こつ）として南北に走る黒い前正覚山が、熱帯の青空にクッキリと浮いて、なだらかな河岸の辺に点々たる椰子の木立を透（す）いて見ゆるのを拝しながら、やがて目ざすブツダガヤに着き、繁りに茂った菩提樹の東にそびゆる

正覚塔を目の前に仰ぎ奉った。

一心敬礼、塔内陣の本尊前に五体投地、至誠をぬきんでて黙念すらく、

「敬白　当道場成等正覚釈迦牟尼仏、過去荘厳劫現在賢劫諸如来、未来星宿劫諸如来、及諸仏所説諸三乗契経、諸大菩薩一切賢聖、一切天竜八部等、及諸如来自証境界、蓮華蔵重々無尽不可説刹土、一切諸仏十仏自境界、諸如来法界等流法門海三世恒常自爾法門、一切賢聖大菩薩、微塵刹土、一切諸賢聖衆、法界衆生、

弟子弁栄罪悪死生凡夫、曠劫已来、没二在生死海中一、未レ有二出離縁一、無明被レ蔽迷二本覚之道一（妄業惑）流転之業無レ歇、未レ識二衣裏宝珠一、自招貧苦已忘却、無レ被二大千経巻一、於レ是諸仏大悲示現二五濁一、度衆生良以釈迦慈父、初従二発心一已来、起二慈悲誓願六度万行一、上求二菩提一、下化二衆生一」

と、慕うは御蹟（みあと）の山河ではない、みあとに光る自利々他円満の世尊の完徳、世尊が残されし五分法身の慧命を、我が上に顕現せんと誓願する、至心勧請の空ははれて、

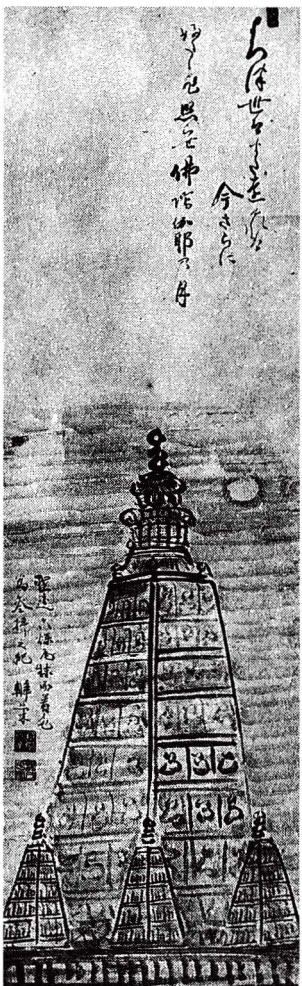
遮那円満の皎月は法身菩薩の雲の上にかゞやき

菩提樹葉の玉の露には丈六（小身）黙然の影をや（ど）る

と讃礼の一夜、常住の世尊を仰いで、

「よろづ世はまだ遠ければ今さらにふたたび照らせ仏陀伽耶の月」

と、今現在の光明を自覚覚他の上に弘願したてまつる。



受生も、出家も、発心も、修行も、みなこれこのブダガヤで世尊が成等正覚したまいし聖蹟にならいて、ただこれ成仏せんがためである。また成仏せしめんがためである。仏月再照、願わくはすみやかに菩提の願行を、自他もろともに成就せしめ給えと、至心帰命の誓願を念ぜられた。

「久方のなみじはあれど三千とせのむかしをいまにするよしもがな」

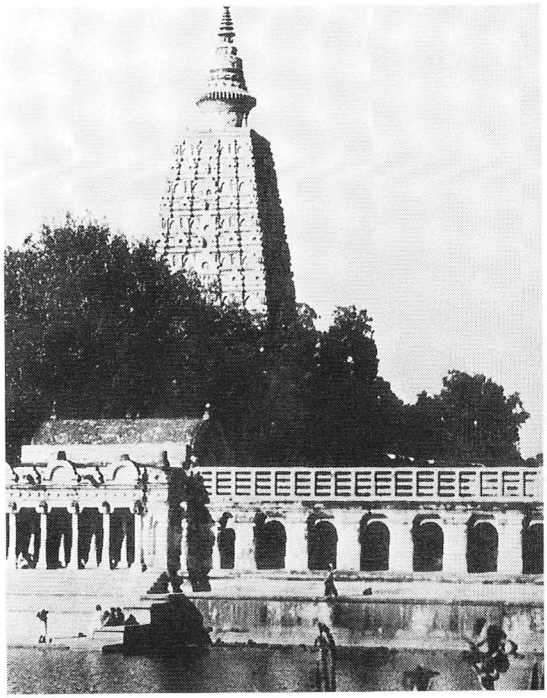
と三千里外、三千年前を自内証の空にさしまねいて、有縁教域扶桑（日本）の地に、作仏度生の光明を弘願する至心勧請の聖地の一霄（ショウ）を、南無釈迦牟尼仏の禅床にあかして、一月二十五日の東雲の光は世尊成道の暁をしのばせて仏陀伽耶の空を彩った。

「草も木もかわり〳〵しふることは（地）つ神ならで知る人もがな」

「世々経（へ）てもそのふることは忘れなそしるべにたてしそとばみつゝも」

塔は高さ百六十余尺の石造九層閣、大塔の半分くらいの高さの土手の緑の梢を抜いてそびえ、土手から摺鉢ような凹地にたっている。これは西暦一八七七年、英国政府によって土中より発掘されしためで、塔の側の菩提樹もその後に植えたものである。大塔の外壁は幾代の信仰深き人の心をこめて彫刻せし無数の尊像に飾られ、塔の周囲には幾代の信仰厚き王者長者の供養し奉りし無数の小塔が並び、阿育王の献じたる玉垣の遺物のすぐれた彫刻に昔を語っている。

西方より侵入したる回教徒によって、インドの仏教が破壊されし毒手をのがれんために、悲痛の仏徒がこれをわざと埋めしものか、あるいは他の自然事情によってか、久しく土中に埋没せるを発掘したもので、この霊地も今は一インド教徒なる村の一富者の所有に属している。



仏陀伽耶正覚大塔

インド教の一僧がこの仏陀伽耶を管理し、インド教の儀式とあって、ある場所は毎日牛糞を塗ることになっていた。

案内の村山氏がその僧にこれを抗議したら、彼はいった。「そんなら仏教徒みづからたって保管せよ」

セイロン島は別として、大陸インドには仏法地を払っている。これなんの因、これなんの縁、

「仏陀伽耶にかたむく月のかげばかりかすかに見ゆる夜半の今かな」